

設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 平成27年11月14日
(39号)



[事務局] 〒648-0094
橋本市三石台4-1-15
TEL 0736-38-3669
FAX 0736-38-3680
文責 事務長 宮本眞弓

人間学講座
第39講

「講談に親る人心のつかみ方」
講談 大石順教尼ものがたり」
旭堂南左衛門師匠



■ 室町時代より伝わる講談
「講談」という言い方は明治からで、江戸時代は「講釈」、それ以前は「太平記読み」と呼ばれ、その歴史は室町時代に遡ります。今から五五〇年以上前から伝承される日本の古典芸能、伝統芸能の一つであります。落語は「話す芸」、浪曲は「語る芸」、講談は本を置き読むというスタイルから「読む芸」と言われています。講談はただ書物を読み聴かせるだけでなく、解釈を加えていきます。

川柳に「講釈師見て来たような嘘をつき」と、いまだに言い伝えられています。これは決して悪い嘘ではなく、庶民の気持ちを汲んで、物語はこうあってほしいとするところから解釈を加えていったところによるものです。ことに『赤穂義士伝』いわゆる忠臣蔵は九割方嘘なのですが、それゆえに多くの方に共感動を呼び、いまだに語り継がれています。もともとは武士の世界において、「講釈」が教育的な意味合いをもっていたのだと思われまふ。

しかしその後一七〇〇年を境にして、講談は娯楽として広がっていきまふ。講談で取り扱う物語のジャンルは3つあり、太平記に代表される「軍談戦記物」、忠臣蔵のような「御記録物」、紀伊国屋文左衛門のような「世話物」となります。現在東京と上方と二つの地域に分かれて講談師が活躍しています。

■ 三代目旭堂南左衛門師匠に弟子入り

私と講談との出会いは、大学四年のときです。部活で落語研究会に入っていたのですが、あるとき観に行った寄席に、三代目旭堂南左衛門が出ていま

した。

その後、師匠と共にお酒をいただきながら長時間一緒に過ごす機会に恵まれ、そのとき師匠の言われた一言に突き動かされました。

「わしが死んだら上方講談はなくなる」。師匠の言葉に「私が継いでやります」と応じたものの、「お酒の席のこと、翌日訪ねるように」と言われた師匠のお宅に伺うと、まだ講談師への決意などできていない私でしたが、なんと、訪ねた玄関先で芸名を言い渡されました。驚きましたが、これも縁だと思いました。それから三十年にわたり、師匠からはお稽古だけではなく、いろいろな教をいただきました。

「芸は下りのエスカレーターを上っているようなものだから、休むなよ」との師匠の言葉は「継続は力だ」と教えてくれます。下りのエスカレーターをコツコツ毎日上り続けること、ひとつたび歩みを止めると「必ずゼロに戻るぞ」と言われました。着実に目標をしっかりと持ってやりなさい、と言われた言葉は、今も自分の中で生きています。

師匠は十年前に亡くなりましたが、病室で書いていただいたサイン色紙には「いのちあるかぎりがんばろう」。師匠は八十八歳で亡くなりました。話しつくせないほどの優しさや度量の大きい方でした。

今日の大石順教尼にもその師匠の姿が重なりまふ。大石順教尼の講談を日本全国あちこちで開催し、特に若い方々に聴い



ていただき、勇気を感じていただき、元気に暮らしていただきたいと願っています。

■ 大石順教尼物語「カナリアの教えに導かれて



明治三十八年六月、大阪堀江の遊郭「山梅楼」において主人・中川萬次郎が家族、かかえ芸妓六人を日本刀で殺傷するという日本犯罪史上に残る「堀江六人斬り」という事件が起きました。このとき両腕を切り落とされるという被害にあったのが大石よね。後に出家をし大石順教尼となられ、障害ある方々のために尽くされ、人々に深く広く感銘を与えられる人生を歩まれました。

中川萬次郎は、十二歳にして踊りの筋のよい大石よねを養女に迎え、妻吉という名で抱え芸妓として養育しておりました。

ある夜、妻が駆け落ちをしたと思い込んだ萬次郎が怒り狂い、妻の家族や芸妓たちを日本刀で次々に斬りつけました。妻吉も両腕を斬りおとされ、翌日瀕死の状態で救出されます。このとき妻吉、娘盛りの十七歳。

その後、一命をとりとめた妻吉は、旅芸人の座員となり地方を回ります。東北仙台を訪れたときのことです。

縁側の鳥かごからつがいのカナリアの声が聴こえてきました。よく見てみると、メスのカナリアの羽の下から雛が見え隠れしています。妻吉の目から涙が溢れ出しました。「カナリアは翼があつても両腕はない。手の代わりに口を使つて、雛に餌をやることも巢の掃除もしている。そうや、うちも口を使つたらええのや。カナリアがそれを教えてくれた！」。

妻吉は文字の読み書きを習い、習字の手解きを受けました。さらに歌を学び、絵を勉強して、また妻となり親ともなつて、ついには仏門に入り順教と名を改めます。その生涯は障害者の心の支えとなることに捧げられました。

(抄録 中川千都子)

《グループ討議》

旭堂南左衛門師匠の講義をお聴きした後、塾生が各グループに分かれ講話内容について討議し、グループごとにまとめられた感動語録を発表しました。

【Aグループ】

- ① 芸事は、下りのエスカレータを昇っていくもの。
- ② ものがたりには、脚色も大切なこと。
- ③ 知らないことも、大切なこと。

【Bグループ】

- ① 芸は下りのエスカレータを昇っているようなもの。
- ② 人は他人と比べて不足を視てしまいやすい。
- ③ 困難に負けない信念を持つ。

【Cグループ】

- ① 芸は下りのエスカレータを昇っているようなもの。
- ② 腕が無いことより、字を知らないことが恥ずかしい。

- ③ カナリアから学んだ生き方。

【Dグループ】

- ① 歴史は、伝える人の都合によって変えられる。
- ② 講話・講釈といわれてもピンとこなかったが、ライブの講話は映像を見ているようで新鮮だった。

- ③ 講演そのものが、人心をつかんでいた。

【Eグループ】

- ① カナリアから腕が無くても口のある生き方を学ぶ。
- ② 出来ないことを嘆くより、出来る幸せに感謝する生き方に感動。
- ③ 講話にも日本の文化を継承する責任がある。



《読書会 Aグループ》

- ・指導 中川千都子副代表
- ・テキスト 『ありがとう (うさいます)』

- ・進行 山路直美さん

27

◇ 自分が他よりも良い役割を演じさせていたいてい るのは、みんなのお陰なのです。善い役割をみんなから譲ってもらっているのです。だから必要なのは、みんなに深く感謝することだけです。

31

◇ 自分の苦楽・幸不幸の根本原因が、自分自身のことばの使い方・心の状態にあるのだと判れば、すべての問題は解決するのです。

35

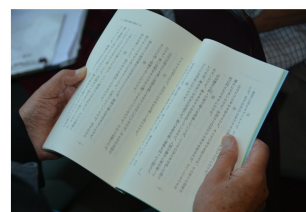
◇ 「感謝は光」です。世界を明るく照らし出す光明です。闇夜の中では、どんなに素晴らしいものが目の前にあっても、見えないのです。

37

◇ 神様への奉仕に生きることによって、神様の助けが受けやすくなるのです。真実の奉仕は、与える心の極地です。与える心を生きたということ、極楽への道を歩んでいるのです。

50

◇ 謙虚な謙虚な本心の心に戻らなければ、神様の本当の助けは受けられないのです。謙虚な本心の心に返るためには、地獄のどん底に落とされても、仕方のない自分であることに氣付かなければならないのです。今までにどれほど悪道非道な生き方をしてきたかを、しっかりと反省しなければならぬのです。



《読書会 Bグループ》

- ・指導 近藤宏枝さん
- ・テキスト 森信三先生『一語一会』(10月)

- ・進行 山路直美さん

十月六日

事務的な仕事を処理する秘訣としては、結局「即今着手」すなわち「すぐにその場で」ということであり、ありいま一つ「義務を先にして娯楽を後にせよ」という人生最大の具体的真理が先行せらねばなりません。

十月八日

人間というのは、平生、事のない場合においても、下座行として何か一つ二つは、持続的に心がけてすることがなければ、自分を真に鍛えていくことはできないものです。

十月十一日

いやしくもわが身の上起こりうる事柄は、そのすべてがこの私にとっては絶対必然であると共にまた、この私にとっては、最善なはずです。それ故われわれは、それに対して一切これを拒まず、一切これを却けず、素直にその一切を受け入れて、そこに隠れている神の意志を読み取らねばならぬわけです。

十月十八日

夫婦のうち人間としてエライ方が、相手をコトバによって直そうとしないうで、相手の不完全さをそのまま黙って背負ってゆく。夫婦関係というものは、結局どちらかが、こうした心の態度を確立するほかにいようですね。

十月二十日

九十九人が、川の向こう岸で騒いでいようと、自分一人はスタスタとわが志したこちら側の川岸を、わき眼もふらず川上に向かって歩き通す底の覚悟がなくてはなるまい。



「看取り士日記」

248

く永遠の命をく

看取り士 柴田久美子

庭の紫式部の実が深みを増して美しい季節。

看取り士会に一本の電話が入る。46歳男性、お母様の良子さん(仮名)

83歳の看取りのご依頼。

要介護5、認知症で息子さんのこともわからない。目はほとんど見えていない。9月初旬、軽い脳梗塞を起こし、左半身が動かない。食事が減り、眠りがちな時が増えたので迎えが近いと思うとご連絡を頂いた。

10月初旬、自宅に伺う。

デイサービス後のお疲れを感じさせない程にお元気だった。息子さんは終始お母様の頭をなでながらお話をされる。「良子ちゃん」と呼ばれるその声がけで、すでに看取りがはじまっていることを感じる。人は旅立ち前に看取る者の胎内に戻る。親子が逆転する時間。

「シングルベッドをセミダブルのベッドに変えようと思います。添い寝をしたいので」とこともなげに話される。

そして、20日の朝「母の呼吸が乱れています。どうすれば良いのでしょうか」とご連絡を頂き、近くの看取り士に連絡を取る。そして、抱きしめて、呼吸を合わせて頂く。良子さんの呼吸が穏やかになって4〜5分後、息子さんの腕の中で、良子さんは旅立っていかれた。

最期の息のその時、嫁いだ娘さんからの電話が入った。良子さんの旅立ちは、手を握るお父様、抱きしめる息子さん、そして電話でつながる娘さんと家族がひとつになった瞬間だった。

旅立たれた当日だけが、デイサービスのお休みと息子さんのお休みが重なった日だったと言う。認知症で辛い想いをなされた良子さんの最期の舞台。それは良子さんご自身のプロデュースと教えられる。

その後、娘さんが遠方より駆けつけられたのが5時間後だった。息子さんが添い寝し、お父様が良子さんの好きなワルツを流している中に到着。長い時間が過ぎてなお、温もりのある背中とお腹が殊更に熱くなる。娘さんもまた、良子さんを抱きしめ、穏やかなお別れの時間を過ごす。旅立ちの翌日の夜、息子さんからこんな電話が入った。

「添い寝をして良いでしょうか?」「もちろんです。しっかりと魂を重ねてください」

この穏やかさと丁寧な時間、自宅だからこそできること。暮らしの中で穏やかに旅立つことの尊さを教えてくれた良子さんに感謝 合掌

「寺田一清先生に感謝」

旧天分塾 副塾頭

西中 務

私は宮沢賢治、相田みつを、金子みすゞ、ファン・ゴッホが大好きです。これら四名の作品が世に出るようになったのは陰の人がいるからです。宮沢賢治の作品は、弟の清六氏が賢治の作品を火災等の焼失の危機から守ってきたからこそ現在、私たちは感動的な詩を鑑賞できるのです。相田みつをの詩も死後、兵庫県の建設会社、米田社長が自費出版して感動的な詩を世に紹介したのです。金子みすゞの作品は、散逸していたが童謡詩人矢崎節夫氏により、ほぼ全作品が収集でき、私たちは感動的な詩に接することができるようです。ファン・ゴッホの作品も弟のテオが大切に保管し、命がけで守ってきたおかげで天才画家の作品を鑑賞できるのです。

天分塾ニュース 166号より

【先哲に学ぶ】

観音報徳の心

何事も事足りすぎて事足らず

徳に報うる道を知らねば

(二宮翁道歌)

人間は、観音報徳の心がなければ何事にも不足の念が起るものです。十分すぎるほど恵まれた結構な暮らしをしながら、その恩恵になれて、そのありがたさがわからなくなるものです。観音報徳の心構えと実行が何より大切と言えましょう。

「二宮尊徳 一日一言」

寺田一清編

【先哲に学ぶ】

事を処する心得

事を処するに平心易気なれば、人に自ら服し、纔に氣に動けば便ち服せず。

(後一八七)

物事を処するとき、心が穏やかで落ち着いていれば、人は自然に服従するものがある。しかし、わずかでも私心を挟むような気分には左右されるところがあると、承服するものではない。

「佐藤一斎 一日一言」

渡邊五郎三郎編

《お薦め書籍》

『新しい道徳』

「いいことをすると気持ちいい」のはなぜか

北野武 著



発行 幻冬舎
価格 一,〇〇〇円(税別)
ISBN1978-4-344-028315-9

『日本人にとって、「道徳」とは何か?』この問いに答えられる、親や教師はいるのだろうか。時代を作る人は、いつだって古い道徳を打ち壊してきた。誰かに押しつけられた道徳ではなく、自分なりの道徳で生きた方がよほど格好いい。「自分なりの道徳」とはつまり、自分がどう生きるかという原則だ。今の大人たちの性根が据わっていないのは、道徳を人まかせにしているからだ。それは、自分の人生を人まかせにするってことだと思う」(書籍紹介HPより)

《大悟徹底》(寺田顧問のお話を抄録させて頂きました)

「中江藤樹心のフォーラム

での発表」(その1)

平成17年8月5日

中江藤樹先生の日本思想史における歴史的位置づけにつき、明確な認識をもつこと。すなわち江戸時代三〇〇年間に於ける随一の学者であり、生まれながらの霊覚者であられたこと。武士階級にあつて出世の旗手として約束せられつつ、脱藩し、母ひとり、在す小川村に還り、村落の一教師に徹せられたこと。しかも、「孝」をもつて思慮大系の中心にすえられたこと。まさに日本哲学の元祖というべきお方である。その学統をうけつがれたおかたこそ西晋一郎先生であり、それを現代に生かされた方こそ森信三先生であります。

(天分塾ニュース86号より)

《十二月 人間学塾・中之島》

■ 第四期 基本カリキュラム

※日時 12月12日(第二土曜)

午後12時〜受付 開講午後1時〜

※場所 大阪大学中之島センター

10F 佐治敬三ホール

※講義 上甲 晃先生

「地に足をつけて」

一九四一年大阪市に生まれる。一九六五年松下電器産業(株)に入社。一九八一年財団法人松下政経塾に出身。理事・塾頭を歴任。1999年退社し志ネットワーク社を設立。一九九七年『青年塾』を創設。現在第一期生を迎え、累計約一五〇〇名を超える。『志のみ持参』『人間として一流をめざす』『人生に無駄な経験などひとつもない』著書、CD・ビデオなど多数。

《塾生 住所変更!!》

※堀りかさん

〒591-8005 堺市北区新堀町2-107

メゾンリーガル48-701

※広瀬育代さん

〒540-0033 大阪市中央区石町1-2-1

【訃報】



去る10月18日 島村不二夫様が、お亡くなりになりました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

「映画『海難1980』は、主人公が最後に力を入れていた活動ですが、トルコの海兵

て秋風吹き……」と歌っている映像の左上で、演じ

人みどり様よりご連絡いただきました。"と、夫

12月5日よりロードショウです。

是非みなさん、観にいきましょうね!!。

《淀川掃除に学ぶ会》短信

世話人 志村隆夫

11月1日の天気予報は朝から雨の予報でしたが、気持ちの良い爽やかな快晴に恵まれ、お掃除日和となりました。

参加者は28名でした。大型ゴミ以外にゴミ袋は36袋集まりました。新規参加者は狭間様1名、メンバーに加入されました。

大きな鮎の死骸が5匹も放置されていましたので河原に穴を掘り埋葬しました。

釣り上げておいて死なせてしまうならば、逃がせてあげれば良いのにと皆で話し合いました。

今月も、吉寿屋の神吉会長様のご好意で、有田ミカ3箱と柿3箱のプレゼントがありましたので、終礼時に、阿弥陀くじをして、6名の方にお持ち帰りいただきました。

た、東様から、サンドウィッチとコーヒーの差し入れがあり、ありがたく頂戴致しました。

参加者一同、大満足の1日でした

問合せ 〇九〇一八八四一七六五(小西)

〇九〇一七五五五八七七七(志村)

